

## ミニ・シリーズ：地域開発における参加型手法について考える（1）

### その1：PCM手法

昨今、開発協力の分野においてプロジェクト・サイクル・マネジメント（Project Cycle Management: PCM）という言葉をとみに多く耳にするようになった。JICAの業務においても参加型計画はもとより村落開発をはじめとして、分野を問わず PCM 手法を用いた調査をしてプロジェクト概要表（プロジェクト・デザイン・マトリックス Project Design Matrix: PDM）を作成する、といったような業務が一般的に見受けられるようになってきた。

PCM手法は、技術協力プロジェクトを立案するために開発された手法を基にして、開発援助の様々な分野において活用でき、なおかつプロジェクト終了後の評価を容易にするために開発された手法である。それは、開発援助プロジェクトの計画・実施・評価というサイクルを PDM を用いてマネジメントするもので、参加型計画手法（Participatory Planning: PP）とモニタリング・評価手法（Monitoring & Evaluation: M&E）から構成される。そして PP は、〈参加者分析、問題分析、目的分析、プロジェクトの選択〉といった分析段階と〈PDMの作成、活動計画表の作成〉といった立案段階から構成される。段階的に分析作業が進められ、最終的に PDM や活動計画表といった形になりプロジェクトの目標や活動を明らかにすることができる。（下図参照）

PCM手法の特徴として、大きく次の3つを挙げることができる。

- ・「段階的な作業」：〈参加者分析〉に始まり〈モニタリング・評価〉までの7つの手順を段階的に作業し、PDMを見て全体の概略が凡そひと目でわかるようになっている。
- ・「視覚的な分析・論理的に把握」：各参加者は、意見をカードに書きボード上に貼り付ける作業を行うことから全体を視覚的にとらえ分析することができる。また、各段階において〈原因と結果〉〈手段と目的〉等の因果関係を整理する作業を行うことによって、全体の状況が論理的に理解できる。
- ・「参加型である」：問題解決に関わるであろう様々な立場の人が、ワークショップ形式の場において参加し協議することでお互いに理解し合う。またプロジェクトの計画立案に主体的に参加することによって参加者意識を深めることができる。

今回、(財)国際開発高等教育機構（FASID）が実施している PCM 手法の「計画・立案コース」の研修を実際に受講した。PCM手法の利点として、プロジェクトの目的・手段、過程、範囲等が明確になる、多くの案の中からプロジェクトを選択できる、等々といったことがいえ

るのだが、PPを行う過程で徐々に順序立てて進めていくことによって問題を解決する際に役に立つということは勿論、単に計画立案をする場合にも有用であることを実感することができた。但し今回の研修において、一つのテーマを与えられて参加者分析から PDM の作成を2つのチームにそれぞれモデレーターがついて実施したのだが、結果としてそれぞれ違った PDM ができあが

った。これが何を意味するかというと、実際に PCM を行う際にはワークショップの参加者及びモデレーターの適切な人選に配慮する必要があるということ。色々な立場のどのような人が参加してくるかによって全く違った結果の PDM ができあがること

もありえるだろう。また、参加者が積極的にありのままの意見を隠さず述べてもらうことも大切なことのひとつに違いない。ちなみに、この PCM 手法研修はこの「計画・立案コース」に引き続き「モニタリング・評価コース」、「モデレーター養成コース」がある。

参考資料：「開発援助のためのプロジェクト・サイクル・マネジメント」；FASID

